

J. J. Prinz

“The Emotional Construction of Morals”

Preamble

‘Naturalism and Hume’s Law’

担当: 中澤栄輔

もくじ

- 0.0 はじめに
- 0.1 四種類の自然主義
- 0.2 ヒュームの法則をこわす
- 0.3 ヒュームの法則をまもる
- 0.4 主観主義の擁護
- [0.5] これからの予定

0.0 はじめに

ヒュームの法則

「...である(is)」(記述的な諸言明)から「...すべきである(ought)」(規範的な力をもった言明)を導き出すことはできない。

⊕ 道徳的な真実の特別さ

⊖ 道徳性は超自然的

(妖精と同じ→道徳のニヒリズムへ)

0.0 はじめに

本論の目的

自然主義者は規範性をどのように扱うか。
道徳性についてのわれわれの信念を描くことは
記述的な作業。倫理は社会科学的にアプロー
チすることができる。

道徳性についての記述的な真理がどのように
規範的な真理と関係するか。

→ヒュームの法則の内実を再検討する

0.1 四種類の自然主義

(1) 形而上学的自然主義

この世界に存在するのは自然科学の法則が要求する存在者だけである。

【道徳にかんする(1)】

道徳的規範は自然科学の理論が容認するものでなければならない。

0.1 四種類の自然主義

(2) 説明的自然主義

現在自然科学の言語で記述されていないすべてのものも、究極的には自然科学の言語によって記述可能.

≠還元主義

高次レベルの法則はすべて低次レベルの法則によって説明されるべき.

0.1 四種類の自然主義

(2) 説明的自然主義

現在自然科学の言語で記述されていないすべてのものも、究極的には自然科学の言語によって記述可能.

【道徳にかんする(2)】

道徳的規範が自然的な存在者によってどのように実現されているか、究極的には記述可能.

0.1 四種類の自然主義

(3) 方法論的自然主義

すべての事実が自然的事実だとすれば、すべての事実(道徳的な事実を含む)について探究する方法もまた自然的事実を探究する方法と同様でなければならない。

【道徳にかんする(3)】

すべての経験的な資源を使って規範について探究すべき。

0.1 四種類の自然主義

(4) クワイン流の自然主義(変形自然主義)

経験の裁きに晒されるのは個別の命題ではなく、知識体系全体(確証のホーリズム)。

クワインのホーリズムによるとわれわれは理論の外側に立つって世界を眺めるような超越論的視点に立つことはできない。

0.1 四種類の自然主義

(4) クワイン流の自然主義(変形自然主義)

経験の裁きに晒されるのは個別の命題ではなく、知識体系全体(確証のホーリズム)。

【道徳にかんする(4)】

規範性は現在のわれわれが持つ信念体系の内側で探究しなければならない。規範を変えていくときには、超越論的な立場から現在の規範を一気に衣替えするようなことはできない。

0.2 ヒュームの法則をこわす

すべての「...すべき」は「...である」にスーパー
ヴィーンしている。

いかなる規範的な事実も、規範的な語彙を使
わないしかたで記述されるような事実によって
実現されなければならない。

→「ある意味で」、ヒュームの法則をこわす。

0.2 ヒュームの法則をこわす

どのようにこわす?

「...すべき」の意味を考える.

こわす準備

「私が...をしたのは義務だからだ」という判断は
指令的感情を表現している.

0.2 ヒュームの法則をこわす

(1) 「スミスは慈善を行うべきだ」が真である

⇒

スミスは慈善を行う義務をもつ

(2) 「...すべき」という語が表現しているのはスミスと慈善を行うこととの関係に適用される概念である

⇒

「スミスは慈善を行うべきだ」が真である

0.2 ヒュームの法則をこわす

- (3) 「...すべき」という語が表現しているのは指令的感情である.
- (4) スミスは慈善を行うことにたいして指令的感情を持っている.

0.2 ヒュームの法則をこわす

- (5) 「スミスは慈善を行うべきだ」という文は真である.
- (6) スミスは慈善を行う義務をもつ.

0.3 ヒュームの法則をまもる

【推論の批判(1)】

(その1) 指令的事実の2つの解釈

(A) 指令的事実とは義務を持つという事実.

(B) 指令的事実とは「指令」.

0.3 ヒュームの法則をまもる

【推論の批判(1)】

(その2) 指令的感情について

前提(3)「...すべき」は指令的感情を表現する.

→「スミスは慈善を行うべきだ」と話者が言うとき、この「行うべきだ」は話者の指令的感情を表現している。しかし推論には話者の指令的感情が含まれていない。

0.3 ヒュームの法則をまもる

【推論の批判(2)】

引用符の消去にかんして

「スミスは慈善を行うべきだ」が真であるならば、
スミスは慈善を行うべきだ。

→これは自明?

「...すべき」は「わたし」のような指標辞と同じよう
なふるまいをするのでは? →第5章

0.3 ヒュームの法則をまもる

【推論の批判(3)】

「...すべき」と「義務」は同じか？

「...すべき」は「義務」の会話の含意であり、意味論的帰結ではない。

(例) スミスは慈善を行う義務があるが、彼はそれを行うべきではない。

0.4 主観主義の擁護

スタート

- 「...すべき」は指令的感情を表現する.
- 「善」「悪」「正しい」「誤り」も感情を含む.
- 主観的

ゴール

- 心理学的事実から形而上学的事実を導く
- 主観主義的存在論

[0.5] これからの予定

第1部

情動に依存する道徳性

→ 構成的感情主義

第2部

その帰結

→ 道徳的相対主義

[0.5] これからの予定

第1部 構成的感情主義

第1章 情動と道徳性. 情動主義の擁護

第2章 情動主義の基礎

非道徳的情動から道徳的情動へ

第3章 道徳感覚理論の擁護

第4章 感覚の主観性と道徳の客観性

道徳感覚理論のさらなる擁護

[0.5] これからの予定

第2部 道徳的相対主義

第5章 道徳的相対主義への反論と再反論

第6章 道徳の系譜

人類学的観点による価値の興亡

第7章 進化論的倫理学の批判的検討